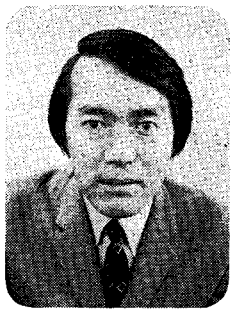
土木界へ望む 17

川が私に語るもの

加藤　汕*



川の問題に私が関心をひかれ出したのは昭和32～33年ごろからである．

そのころ都市郊外の開発が進み始め，山手中小河川の氾濫が新しい災害として注目されるようになった．もともとそんな場所は低地と違って，これまで水など出たことのない場所で，しかも，とるにあたらない夕立程度で，被害が出るのが非常に奇異に感じられた．そのうえますます解せないのは，そういう場合の専門家のコメントが，この現象は開発に河川の改修がついてゆけなかったためだとしていたことである．この論理でゆけば，開発に伴って水の出方が変わるだけ，排水路が大きくならなければならない．しかも，そんな場所に行ってみると，まだまだ開発は緒についたばかりだし，川はと見れば汚れた水が底のほうにちょろちょろと流れているにすぎない．それらの川の中にはかつて小さいながらもいつも清流が流れ，ほたるの飛び交っていた場所もあった．

何かが狂っている，と私は思った．もともと水の出るところならともかく，小さな水路で十分に間に合っていた場所が，開発によって水があふれるようになったとしたら，開発の仕方に何か重大な欠陥があったのではないかと，まず疑ってみるのが自然というものであろう．しかも，流れ去る水は，かつては地下水をうるおす貴重な資源だったはずである．

それを開発のほうを与件とし，水資源を一刻も早く捨てるために排水路を改修するというのは逆立ちした発想ではあるまいか？　開発してももとの水路を変えなくてすむような開発でなければ，真の開発の名には価しないであろう．それは，開発によって生じた不利益を他の環境にも押しつけ，外部不経済化する一種のたれ流しの論理にほかならない．

それでは，たれ流しでない開発の仕方は可能だろうか？　それは可能なはずである．もともと岩盤の上に降った雨は一時にどっと流れ出してしまう．それが土壌が形成され，植生が覆うことによって水の出方がおだやかになり，水質の良い水が，いつも平均して流れる川となる．こうしてでき上がった自然のシステムのおかげで，開発前の水路が正常に機能していたのである．開発によってこの自然のシステムを破壊したり働かなくさせたりしたら，それに代わる人工システムによって代替，あるいは補強してやるのが当然であろう．それによって開発という部分の変化が，水系の全体システムの変化に拡大することを防ぐことができる．開発と環境管理におけるホメオスターシスの考え方である．その意味で建設省がこのたび雨水の現地貯留の検討を始めたことは非常に大きな前進と評価してよい．もし建設省が本気でこの方針を貫くとすれば，これは治水思想における大転換となる可能性もある．ただ，それには小手先の技術にとどまらず，水管理のシステム全体の転換が必要である．しかし，せっかくだからそこまで徹底してほしい．

それは一口でいえば，開発による外部不経済を全部内部化するシステムである．水には水質と水量の問題があり両者は不可分に結びついているが，二つを扱うと複雑になりすぎるので，さしあたり水量だけを問題にしよう．その場合，出発点は，開発者はその区域内からの流出を原則として開発の前後で変化させないということである．すなわち，下流での河川改修の必要を生じさせない．そのためには，現地貯留や地下浸透を最大限に活用する．道路その他の公共事業も溜池や両側の緑地への散水施設を必ず義務づける（その分までの用地取得は道路の必要施設とみなす）．

個人住宅は一番問題であるが，これも私は必ずできると信じている．例えば，屋根に降った雨水は地下の貯留タンクに貯めて雑用水として利用可能である（自宅において実験企画中）．庭の水は空井戸で地下浸透の計画もある（進士 1976）．土地にゆとりのあるところでは，雨水ばかりでなく生活排水を処理後芝生へ散水することもできる（千葉県大原町にて実施中）．

これらは一見非現実的な理想案のように見えるが，計算してみると用地も費用もそれほど大きなものではない．河川改修，水量等の社会的費用と比較すれば国民経済的な利益は明らかであろう．

環境破壊を伴うこれまでのたれながし式開発は，そろそろ全面転換をせまられているのではあるまいか？

いま求められているのは発想と社会的制度の転換なのである．

（1976.8.10・受付）

＊ 日本放送協会ディレクター 科学産業部